

メディアの次世代

【インターネット編】

これまで本連載では既存のメディアとインターネットの関係を主に論じてきた。今回は、これまでのまとめとして、メディアの大きな変遷の標榜となるインターネットを取り上げる。最終回として、インターネットを軸として、メディアの今後の展望についてお話を伺った。

インターネットの可能性を展望

メディアに共通する部分は、インターネットの境界が無く、コンテンツが自由に流通するであろう。コンテンツの流通において、テレビ番組のネット配信があるが、中村教授は「番組の権利処理自体に問題はありませぬ。ビジネスとして成功がなかったら、配信がビジネスにならないうでしよう」と述べる。中村教授は実際に流通しやすい市場・わかりやすい権利情報をつくることを大学で実験している。成功例が増えれば、投資をする企業も増え、問題は解決に向かうと考える。現代人のコミュニケーション



中村伊知哉。1961年生まれ。京大経済学部卒。ロックバンド「少年ナイフ」のディレクターを経て郵政省入省。98年の退官後は渡米、MITメディアラボ客員教授などを歴任。現在は、融合研究所代表理事などを務め、慶大大学院メディアデザイン研究科教授。著書に「デジタルサイネージ革命」など。

「日本のユーザーは面白く、敵しい」と中村教授は語る。この数年新しく生み出されたものは、すべて「ユーザー主体のもの」だ。これからの傾向は、徐々に考えられるが、そこに日本のチャンスがある。携帯電話などの端末の新しい

「ユーザー主体のもの」だ。これからの傾向は、徐々に考えられるが、そこに日本のチャンスがある。携帯電話などの端末の新しい

「ユーザー主体のもの」だ。これからの傾向は、徐々に考えられるが、そこに日本のチャンスがある。携帯電話などの端末の新しい

慶應塾生新聞
第451号
(2010年1月8日)
塾員、教員に聞く
② IT業界特集